The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2024, 15, p. 8-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103383
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

社会デザインとも呼ばれるソーシャルデザインは、利益をあげるよりも社会問題の解決を優先するデザインとして知られており、この名称はいまや、大学・行政・企業において便利に使われています。社会デザインはその性格上、現在（いま）と強く結ばれており、目の前の問題にとらわれがちで、場合によっては、デザイン活動であることすら忘れ去られそうになります。そのため、少し離れた過去にも、少し離れた未来にも、ひとしく目を向けて、社会デザインやそれに類するアートの可能性について深く考えてみることにしました。

二〇二三年九月三〇日に、五つのデザイン関連学会によるシンポジウム「ソーシャルデザイン―過去・現在・未来」をオンラインで開催しました。デザイン関連学会ネットワークは、日本デザイン学会・芸術工学会・道具学会・基礎デザイン学会・意匠学会からなり、年に一度、共同でシンポジウムをおこなってきましたが、今回は、意匠学会がこの当番学会として企画にあたりました。本号はこのシンポジウムを受けての特集号であり、広く投稿依頼をおこなった結果、一〇本の論文および報告を得ることができました。

本号では、社会デザインの語を、一般にいうソーシャルデザインの略称として使っています。この言葉にかぎらず、日本ではカタカナ外来語がやみくもに使用されがちですので「デザイン」の語以外はなるべく訳語をもちいたいと考えてのことですが、各論考における用語の選択については、執筆者にゆだねることとしました。巻頭論文では、社会デザインの意味をやや狭くとることで、社会活動としての領分を見定めようとしていますが、本号全体としては、社会デザインの定義にあまりこだわらずに、意味深い論考をおさめようと考えました。

二〇一一年の東日本大震災がきっかけで、社会の仕組みにかかわるデザインや、人々の関係を豊かにするデザインが、以前よりも盛んになったように見受けられます。デザイナーがモノだけでは問題の解決にいたらないと悟ったからでしょう。本特集は、わたしたちの研究がこの変化に追いつき、取り組みの後押しにならないかと考えての企画だったのですが、いまこの文章を二〇二四年になって書いています。能登半島が大きな地震に見舞われ、日に日に被害が明らかになっています。お亡くなりになられた方々へのお悔やみとともに、地域の皆さまの安心が得られることを願ってやみません。

高安啓介